チ 11
3885

# 琴曲抄序

抑琴にハ箏あり琴あり琴ハ七絃長三尺六寸或三尺六寸箏ハ今世に用る十三絃ハ往古の琴是也然るに箏を琴と称するを琴ハ弾て知ふ人稀にして世にあまねく箏を號するゆへ呼ならへしなり

昭和十六年三月五日 石澤介吉氏寄贈

門 チ 11 號 3885 巻

二十五絃なりしを中よりさきて十三絃とす
十二月に閏月をくはへたるにかたとれる花蕊
琵琶はりわたしき調子とかり十二の指式口訣
秘傳五箇之調之瓦一和之傳五瓦成就傳
十曲八曲寄秋之三曲調子之傳呂律調子
三寄生平調圖傳許可傳印譜大琴

此節の曲等あり滴としく音曲乃訣
ゆるしをうる者ハ糸筋をもて吾為とすへし
十三律をしをたへよく和せる時を人の心を
やはらし邪氣をさり志をもとくし德身おさめ
操り有り擇ミ教人ハ書并と訓りし
四民ことし此身を絶ず相つゝしむへし也

はつさきへうつし花葉の日とは人々渡んきの
空かすみし月かえしぬ晩秋も草かれし
衣ともうかれたらし数々の波もうけし中なり
琴と申は唐伏羲氏始まり又そ
神農氏より始り我朝へ伝へしとも
いへりむかし天武天皇吉野の
瀧の御殿にましまして御琴
を弾せし時ふもとの山かげしき雲の
中より天女あまくだり袖をかへし舞
ふきうたひし是天武天皇の説に此時
天女の舞の始り石もし五節の舞に
和して初めて見せしより今に

世よ傳へて澤庵と名付くる其後安
永代り会婦し石川乃兎子といひし人
有あり事く傳見しよはり其余の秘あよ
のかりて定人にあひて秘曲代習えて
京都東門に傳法書を集めん家之譜
の此伝記尾几しよ來き人の此ほとし
傳へて秘曲経ひし代々人傳へてよ
到来まへ時筑後國善導寺乃住侶
世にすきし人にあしもひ付きひて其の秘
曲残傳へて授けて肥前國の住人鈴順
居士といふ人に附与せしむ賀明又國出
諫早住慶巌寺の僧玄恵に傳しつとふ

おんまに賢人吹寄りしまして大内のほとり
小き海にふ時やいかにもまほ聚れ尊ける
哀れなりけるしいとこへハ大風も感應の哀なり
申さんしめ立せ給ふにほまとい人の子
あやしこにまて大風も寢なき志りしかりしと
すせはまて入給ひてかやふに居させ給ひて

うくま思人あつかしに唯一曲とまうしあけれて
それとし給す大風も受おとろき感興し給ふ
膝りよつんをとみて参りなかり給ひしかハ
いとか倍しうあはれまとて人間に免して
深せしふ給ふに関人耳を清く感し
給ふ事あまり張りなかしをきて賢人吹なりとの

聞く人もなかりしに大風の夜のあらしふきて
年十四才の時より此人にはなれず
頼み置しこのさま八ツ時にこまりぬ
有けるに御来のまへ後法水にいふ者
と法名を得て頼みおもなる人ありふ原も
郷くやまとの国の法名を聞てハ人々く

心法もなく若のをはミせいふもし
あかず聞くる都と諸道をすゝめしのみ
ありにしを還俗して柏屋と号し琴
糸竹あそびのすさまじなかれ家に八橋検按とてまく
法水と遂に法名をさたをいふかくて
又祝ふ京国にありそめて云出して随身

琴曲といへハ世俗に八橋氏をいへく
かの流にしてハ其本ハ寂雅にして筑紫に
遊しを法水か是を小深爰にして之を伝へて新に
十三曲を出す十三組といふ是也作しく
十三曲の唱并をも敷て其外かさ分す
所るハ深谷構流深氏構流の数云説こり

あれハ古今の琴曲を見るに今十三組の外に
新曲二組をも補ひ八橋一流なからしむるに
其訓をも作け唱并の注釈をもくはへて是を
曲抄と名付兒女のたよりとなさんとなさん
志る季

者

元禄龍飛乙亥年如月上浣

葉落

忘てん示先
盤渉調の示也

ゆきとかふし葉の名めくとふくまのち

あまた恋さいろくわうきくめしうかしや

さらまくや

葉落とハ葉の名富貴とその妙ハ今も若衆と云加へ候
ゆきとまりくらうきとさらハの他ありて徐々ミくハ名のかりをと
ゆく可き清ハ之人とハ今々し此の唱弁妙殊ありて盆会の後云ふ
ひく〳〵し

春の花のさん我らく色めしらくもり
かゝしらゑんつましゝハゑんのちくさむすハ
おもしおもしと河ゑ津の

歩んきうとはその曲をうたふしらゑんハ曲も
きうくの名ハ源氏物のゑんの巻にさかしきと井筒より
南殿の桜の宴んおもし時春んしの君春のうたはす
河へつれとふ舞とひと物しらぬもう舞をまふ
春鶯囀とふ曲也頭中将柳花苑といふ舞

かうもし氏の巻柳花苑の曲とは柳の花の曲ハおもく源と
おのつし柳花苑のきうくもふいふかうへし

月のよへ春ぶし色ハ夜さしと浅き朝
河さ桜雲井の今をおもしに霞く
しむく

秋風楽の曲に翠の声の秋もかつひて夜さもとつく
かしおもらふおゝ如し信秋のうさ有

昔の人のちかひにゆかしく聞えしは
ふかくもいへそらに絶すへきもの也
又むかしは唐の清かりし月のかけ見えしにより唐を
井の月よりも宮の内に影ありし仲実の句あり
元の月もあやしくも昔の月を見しと也
清しき月の唐と見えしかる
此かの新詩中にも三五夜中新月色二千里外
しても人の友をもかたしくつれはかりし色は
ありかたきかな

むせいてんのうちなれは影まさしく代々にも
ゆらかりんのまゐらせは月もかけそへし

保胤の清らかし詩に綱條朱鏡の銘入ともに夜の光門
とは禁裏といふ井しきりてかくもあらし月影
うけなかしとはよもひさしかれとやむかし

あし曳てん清浦にとのふきしきもを
たえしきぬ月夜のかけしの
うこともかれんしの丈哉

花のえんの夜源氏の君忍ひありきてこきてん殿
のほそとのにたちより給ふに内侍のかんの君たちより
おほろ月夜に似るものそなきと口すさひてくるを
とらへしよし袖をとらへ給ひてけり
如何さまぬのおもひ給へるもけに八月の
おほろ月しぬれはさらにそれなれ
こよみにいまおほしてあひとおもひそめれ
かとらへり源氏はゆるされ宮桐の井ねし大将の
なかり給ふは源氏の後といへる

春の夜や此夜半の夢はかりなる

手枕にかひなくたゝむ名こそをしけれ

又此夜やたちたる袖

葉の上の十七もの歌のことをも君みてられしく六条り
おもしろ此源氏の君ひとりにて夜を明しくらし
給ふ時宮忠のひとりひ給ふ詞の道なとは
さりとはそれもしきゝてさくしかれ
うち見るにものゝ給ふに給へる
ほうてこの女の御事をいふことをのかけにて
かなしきものゝあはれなりけるつけ
ゝろものと

七やれの色いふしもおとしハなのとう
おしけふんら恵う恨たりやとと
むりはかとうきれさしうん

あまとハあうこうしのけいうきん梅うへとしひしきのうんや
きし思うえと残てこあふし山猿さんこやしときこ子
人のきれの中ゆゑやふうんとてを通て呉の
とはあつやしゆゑやとなさけ来てもうんときは
さうあしと紅葉孫ゆきえとは中ちう浮ひて小家の

被やしいらうりて紅葉ゆ梅とさしてはいゆゆ今じとなそう
所ゆ来ゆしといへう

梅うえ　ちよとのきうしたいふ

まるんうえ今引さもうえ芳ハ古き残
年へつ彩梅はいうにせん花ゆ
やよ秋はゆふむす

むかし枝ふしもちくひもせは華成ともは鶯ハ梅行と
移りとかし巣をもらすのしはてよはそもし那
かのゝ桜をうけて移りしとは中那かしともお
う行幅うはいうに是んとそ非了え梅のむら礼
へし梅の華ちりしハ梅の早うう那あきおさん
かよにうしら〳〵当かくらけ

（とうけむよ）華ちれはとの（かうけむよ）浮き〳〵（とうけまん）さりしの
（かうけむよ）おとの鳥ちれ（すうけむよ）こともれの（たつひて九二つ）そて見うしに

（ひてす）よ風ときは波（七六）おもう（かうのこひ手）（たつしにさ）秋く

源氏の君中川のほとりかよふ志のひく御くし
りうかりはうわれ家ゆきし為は何とは聞に
ましへうきれともておうからみ志うりかとそ
ふかしよみ入給ふ半はうしの白いまや白い
おかまて源氏升

立ちれのかはお川のみかきま波
り花ちらし書とつ錦移しくそらふ
いさ予めくはるさり

（とうけまん）さもひ移りの（すうけまん）中見んの（たうけむよ）海てにちさ礼

あけのこはめくはまよの浜しさ

ゆめてしなうこふしかうそふのしか

新古今集某卑きこしめし一首よ

おもひ絲の中央の海てふからきりしと

はめて八まよの浜しさしてり

ひ字のかく浜されても

はま千鳥なくねの霞にあめひとつまし

わりの絲の命世にたえんとてしらえ

わくこ絲と〔し〕えしなくらしるゆ

源氏も須磨の浦にさすらへ給ひし時琴かき鳴らし給ひし

琴をかきならし給ひ浦に弾きつゝも浜の鳴るさ

枕をそばたてゝ聞き給ふ

友ちどりもろ声になく〔あ〕けは

ことよりめ〔ん〕のこゝろもそゝのかし

かしのこゑとゞめて浜しけふれぬ

ちく酒ものゝまゆにみだれおもひへかゝは

そらもみえく八千流おきつれの恋有

むしのねそふしのひかり

ちりまゆこハ白糸をひいてはなれてもいひちまとハ

ゆきぬきを浴衣若もすゞハそ浴でのなかたハちそへてい

我しきよんそうしすゞつきゆき

すゆきしよたもうやまでとぞくて

八十のおきなれとはおもへうち八十ゆかしさへうちなく

としおひへ浴とかんとくハ七千とともに八十とも

いつ恋ゆーうへ我そうひさそて年おひめ里とそ

おしうきうつ酒うれしき母も年をうちもちろく人と恋ハ

なかうきなれたうそかそうして老ゆしきうらやてさ

又千の松が枝やさしそゑんくあさきた

なかしとかのしれおようつくゐ

樹ともみなれにつきぬしさん

三保乃松原姉しさんいう道を旅行乃菩薩を合せ
松世姉きもれく波ゆ川々如月乃なりきし姉して
日本の蓮華正能先手一の所也

## 仏書

おく海のきうくとも云

末緑浅草乃秋風母志た北浦

和乃なき海くあらてうしも紀

訪ともを紹く仲見寺ともぬられ

源氏ものの光母心浅くしの秋分く海ときとうし
と浅く道こ行年乃大晦日の夏く寄こゆうとゆひん
うく波よ深く第に入ともうく来こしてまくとなく
行く道前海ものそうる秋行乃秋分をうりとめる
あり候し

姉ら里波先ゆくゆしも先きて岩

月　すゑ川ちやことふとあふし

まん夏こはありや守やゆし

いせものかたりにもむさしの国としもつふさの国との
なかにいとおほきなる川ありそれをすみた川といふ
その川のほとりにむれゐておもひやれはかきりなくとほく
来にけるかなとわひあへるにわたしもりはやふねにのれといふ
白き鳥のはしとあしとあかきしきのおほきさなる
水のうへにあそひつゝいをゝくふ京には見えぬ鳥なれは
みな人見しらすわたし守にとひけれはこれなん都鳥
といふをきゝて
名にしおはゝいさこととはん都鳥
わか思ふ人はありやなしやと
此所にてよみ侍る也

（とけまく）夏の夜の（二七十合九二ツ後の九分）かけかの（九けまく）ゆ見かし（九つりてのれん）海を

（きんけまく）おもへは（九二つして きんらくとれん）白く（四九四九の石より）かりしぬるそ（いまん二つ）月
（きんらとゝ きんれん）かり（らてきんら 一とられん）ゆす（八らけ四ニらけす 二八一又）かの華
都にかくこきれもしなく鳥も夜かさなれは
ゆくつきのゆめ
夜の夜の名残川なれはかとれし
ゆめくまゆ人は物かなり
おしもののとうの光を白き花の草にもかくまく
ありとさし次ゆ不さしてまの華しゆり

（十らけまく）我のともをすむ（ひさ二つしてうさひ一又 九一つての れん まり分 八八らこうし）まくらよ（一又後の又合うさひ らてさ）なつして

きゝわれおもはれて人目をしのふ
うちまきして娘子て福屋寺
もし路

是ハ源氏夕顔の巻の詞にかよひ源へ小源氏出居とし
此比の人もまくなる事いとふかりて行かうて
源へうつくしの夕かほの巻にいかひてかにし給ふと
つゝめぬおもしくれおも夜夕かほうへそそのつけも
うれしきてもおもと源へうちのさんうえふり
おもしこゝとうちつかけり花のなんのおもとふす

たまさかりす
清げなくとをやりまさはかりの山をとゝむりさまに
くゝかとまはうつ世源をすゝ娘ろさかとに人をと思つて
おかしき源へ略　此世のこすぬちきうかと思ひてのめ
源かみうちとはやりかと源中りのかうてとく
世かましと私人をおかく源ハ人の世の人のわとえむり
源らて古道をめしおかてましきん花かせさ草川へとせ
源ふ略
さうの源ふ源かくに明け玉ひとまいうちてるかさ
かへ花さきにとまいのいそき源ふかうのめうちの世
源かましハ古道そのわかぬそれうちまきかうし去
かくまおかしけかりきてあかつかめしかつ源になれ
とれ門の去の字まかうとくえん源けらもそうそて
しくかうさくらしきりまぬくし家家わなれとゝま
さへおけ源をましハ山をそてさいとふ娘おしてあかりると

早図

あすかの川乃流れの淵瀬もかはり浩
そのかはり世にしまでかはるあめ
そゝ浮きましやなをもらしさん
いのちや

かの川ハ大和の名所きのふといひけふとくらしてあすか川
ながれてはやき月日なりけり此川ハ淵ら瀬さしまつ跡よしあんたるへしとなり

これとこれらみハかつき浮し観乃
ちきりとしよひのそゝの衣あくゝ
姉のきしぬうれとりいろしこ浩
ちきのこひと紀しるゝやみるゝの
うたりこの

きそれハゆゝへの事にそなたさハそれもの事なし
萩の戸をは林中にあるにも秋ちらしと経くらきしこれ
戸にも蕉琢和尚の字
こゝやさしきをかしいにされそわかりぬ
かふもとの戸の華とたかけり

天下太平　むかし露のことくたまふ

てんかたいへいにちかしきにおさまれ

此代のまりの数をかけハちよせ
姫のきしてよろこびけりめでたし

此一句は世のたくひなき露は此君のまことの代々そて経文のとき
おめでたしとしてはしはいのちのうちにかしこまらきこと
となり合せのしてその切石のくのいはひの身しんの本
ありしくみのきはなれのきさあしわかし人の心
小さくかはらひしてよろこひし合せうしいはれちよの
うそんにうけひさきれしとてへしいそしなんきなやし
ちしみとしてす三姫とともにかかせて祝ふへしとし
よろこひ姫のうちにいきよろしく御代かさねめでたきを
いんわうかせきよろこひへしは姫のうちさにとしくふもと
けふへ入事にしきれのたゝハ姫いはいはしきさ事

かく成りて是乃為ニ思ひをなし入り

人をしぬちぎりとハわかきかりし心をおもひ

ほくむすびてとむすびの絶り

いつれともてのかき

人目成きの小立入のこしさしとハ世中たへていかし

第ことふりつきて行しいもとしと思ひと思ひいり

又いつさ我と世の事まにわれて人ニ立と心ちきりと

立まてやこと思ひ出しきもの人の事また

次

ちりくと白雪さ月成いてのく

うつうしこりくゆきのきてり

きえぬなのきこいのへ霜

西行の歌よ

なげけとて月やはものを思はする
かこちがほなる我なみだかな

はらはらほろりの志めしをそうよ
へしわたるなるらし

花のえんの中に恵む我が侭月夜り

こしくそて流さるる忍ちぎりをとげて

あはれさくらんしぬ狂

はるさめの月夜の恋しのせんぶんしの色婦と
神とこそ御頼へいさしおもひまするれとしいづ恵の
人と思しめすらくさまおもちそうとぞ

何よりみちやねらむ縁かきならし

おとの粧神乃めくみはあいそめて

すきしむしぞりしつん

ゆうし入道源氏長氏秘蔵にうけ給はりしをあつてむかしの
うへに深くとりうせてきうせなりかはしてはいよいよひとかたり
うつうせなりしとともり此入たむかしの歳ほどかたる人々
はうきせなりし年に侍りしにまふていのりをなりし年
ことにひとつのかたちをふかてこせしてこひとつのなかにはよ
あいなうさへつうまうれ侍りしの秘のうちこしはく
けうしのうへの勝にあらしけふひき言はひく経言の
新わかうさけ給右尼公むしきさのうへともしの中になりしれ
うへかやしていきかいてしなんし侍りしにかなくはくて侍りし
と此尼公の寺にて

むかしこそきりつきとしれね侍りしれ

神の走りし越え所に侍りけりと

と縁せしまいこそうつかやのてこうを合て侍り

瀧のいとかしきこそ川たえぬ〜

あらしふく花のふくまこそまいてとらり

いはのまわりを侍りし

秋の山かしこのはあきふかきこなみにい花ときの
こし田のめとりいふは秋にはてきここそそまた秘事なりいふ春に
侍らさとらいのかたにかはらのいかなはしかといる
きゝふのまし

声白ぎんなんやまこ虫の口かりかし

おもちゃ秋の夜そしらう

きぬたさめ大空へかしかうちまえしれないさく

# 落雪

ちのらぬきうくだふ

ふりしやミなえんうとゆきの

ちまうをもうきふし人のしてきて

あらしも心しや鐘しん

源氏雅かおや八のこやう世のひく後大君け見こみしい

ふりしひくもしれ家よけこみ

おもふの松もぬけりれゆきしに

きしかしん心とおもそ侍りそ

と詠ひへり八汁文八のこやのけへ比化の三ふ

いつまもうもつしき年おほし京ちら佐

浩ひもへし

きよしまんてれうふひも日これをそ

この浮世のあはひはかりとはか
らをましやむかしそあさけ
ゆかし袂

ちきりの姫きみにいひあはしけるに
玄宗かうしていまひとゝいふして七月七日を長生
殿のことし天よりひとつはなれよく
の鳥となりんほねかはしつまつの枝と
なんそちきりしものをはなれしとちきらも
かくれ世のちきりとはいまし

和かむしさんとまたなみたにぬれつき
心の亀のうすなわちさをさと
むもいしとの葉のゆかりともへし
さんしの寺よ
まゆはらてかいしさんとかしさ秋の
ねすれしかひたれのへの草
源氏の君前のかへらやとよきの小野はいはて小山よ
んきえんかししつさきのへいはかりかのらや

此歌は都にて似せ絵はゆへむくとりて二条院
の御すきへ給はせけるに此つゝ菓の御ゆりとは紫
の御宇也

すけまく
志のゝめの海に紀ゆる雲と婦くむ
とねさんにころつろ
わさ乃国よ乃はしる
五十六合二交
ゆふ
とりけまく
すりけ十ひり廿五十六
かゝ紀や花むさおりけ
はりけむふ
二三四五一二三

是ハ歌の者とよむ六条乃二条もとの京へ源の三位なとし

御しくわろきみ御しせ給ふ御よせんさいの紀
いろくに侍られけるに三位ひろしろ給ふ
有り中将乃君とく此嘉名の宮女まりおりか侍る
らゝし御よ中納乃君のまてくいとふかやれ常海
めさしるかりけのあはらんしてまみのまし
かゝらんよ三位し引とへ給ふて

唯御有りつれてふ所て侍しめとも
おしゝとうしき常さの調も
いうまへさとてよ後つゝ給へりゐし時
西侍しきの三条のとおりしるおかうき御くむ
ことつ侍のまつまのまりうてまさしめさまれ
川しめさのまり承ゐてよ歌の中よ御へつて
歌の国おりてまつるかと絵り御かく御しと
ありゆりのりとめて侍ま也り

世乃人のあかしの光し月は

雲とのかゝるそとおもへはく

なかゝに玉かと流しぬく

東山長嘯の評ニ

世の人の真月そおもふ光しらることそとと

おもへはしぬらし秘する

此事ぬくはいきれ処

うき世川乃花いとさうさんに

むさしもわいるか岩波そうき

よりわか岩まちら次ものつ

東方のうえに

きしの川岩あとそうくり水の

きめくそ人と思ひそろてし

此うちまり

## 雪綱 あまびろきよくせいふ

ゆきのけしきのわけしそおもふ
さ花のちりぬやいかにとおもしろきハ
せめくに海ちへしきみこの
くもゐさ

またおもしろきとこそ思ふのなきちるかよそへてこそいふ
なん子飛葉よ
吹せよしろえ紀梢の華ちりしと
こゝえかきはおもしろきなり

あさ海しやましきハひとかたにかせ
の冬きうちもおもしろきしおもひ
とはいかの世よりそすたれん

夕きりハ源氏の御子なりあふひのうへのはらなり雲井の雁ハ
伯父内大臣のむすめなりしかはいとこのよしみにて一所に
つよきれくむつましくおもなひたりしを内大臣の御たちさしはなち
雲井の雁をめしよせて大宮の御もとより北の方のもとへうつし
ちかく見まほしく思ひわたりしをかくへたてられぬれは
ゆくへさへしらぬ身のうへにて雲ゐのかりのめつらしき
みそらになくこゑにみをよそへてなけきつゝあかしくらしける
ことはとめつらしきみやひしきみ源氏の大臣ハ夕霧の
わかきほとは位あさくて六位のあさきみとりの袖をきたり
雲井の雁のめのとこれをあなつりて六位すくせといひし
六位すくせとおほしけるも思ひしらせむとてあさみとりの
ちかひもたかへすいまはおほきおとゝの御むすめを
かたらひ給ひしかは雲井の雁のめのともいまさらはつかしく
おもひけれともおもひおこしてかしこまりけれは

とけまく
雨と夜見えそおりけるとちしけくと
わけきんけ
ひふら
〓しく庭のおとき次音を催まく
中ゆひて六おり
ひふかけまん
〓川折り中見えて行見んと色苗

夫けしくさうしう夜八こ数とかきまり出ふ人濃
おりけとまなるとてうんしとちよほしき次の
御らくむかしうえんし裳の次見まうかるの雅孝卿
年母
給ひ給くまと夜雨ま身の歌一云
中ゆかしてや一夕もちれ

おもむきハいとゝさにあひしれ
人もあハれむしまそうつりハ宿されれ
秋乃夜の月ゆかしさハ何ゆる

金葉集乃うたに

おもむきハ立しき人も忍ひしこさに
うつしハ只とも秋乃夜の月

はるとまくつまり

こ緑乃はしし乃かよふきにの
河ぎしの松の風ふきあかり
さらし松乃せハおとのねすり
そろそ

琴ハ流泉乃きよくといふ曲ハ笑君手まへ
おもれうといへる文

春の夜ゆめのうきはしとだえして藤原の亜相公よ

うしろ夜の夢けゆくまに二ツ五ツ

冬の松が枝ふくかぜさむく

おもしろきときの清しきさ

御しきれの山下ほそきゆきさうひ

おとの音のきくおりにふし

いつとも琴の音よかりけれ

（とけいふ）かふひのしらべの（さんごろつ）（とんさん）こゑの（きんおて）かどの（とこ）（ろつあ二六）

（さんいとこ）まはつもとおもりかしみなれば（すけまく）（まつあそそむろ）（こし又ろあまんこし）

かしこき清きあき八姫かきらしみ（すけまく）（ろのまん）（九二ツ）（又十）

あくべし（ろて九二ツ）

朱雀院の昔よりかはらぬ河のほとりに住けりしかれ

源氏君の御かたみにのこる御すゑ御むかしの文源氏

の君ひとかたに清ひし六条の院のすゑ清らかなる

御清ひしの御車の音とさしそひ清いつかなる御

のうへの心よりのこりいとまありのうへに在ゆく

うしみて清いのすゑのこかりて清かひのうへと

とりなし清ひしけんなと清しくまつり

雲上　むさし野しきうしたふ

（とりけ生く）雲のうへ（わりけひふ）昔なつかし（とりけ生く）見ハ河のさし（ついてと五十五合）

（六二ツと二ツ）むかしに（わりけむふ）かはらし稀ごえ（すりけむふ）しきまよ（へ）し

（すりけして五十五合生く）雪ちてきし（へりけ生く）あつしや（六りけひふ）ゆうしき

雲の上とは禁中の事なり　むかしハ雨の庵の事也

雲のうへ昔ありし世しにかはらし絹ゆと
うし□□のうちそ□しき
此手小野の小町かわらむろしのうししひつく
ちらしし小野ゝ小町か哥の集にきこえたると
世にしられたる也

（六りけ生く）おもしろや（すりけむふ）汀にうつれ（きんりけむふ）花さちるの

（一又た二つれ合うしふ）あかへり（六りけ生く）我ともの（八りけ九にりけて生く）花かよしたまし（ゐて九十）

とナ八とこつし
九きん八きん
ひて九二つ
天しつ庭なほまと孫能まぬ

衣のうつきし新古今集より

あまとさふ花ちらされり風をさそ
ひしおもきれ素(?)あなくし

八けまく
かけむふ
ナけまく
きんけむふ
そけむふ
中くゆきし見えつゝまなほ花をは
ものゝおもらしきまそ草の

ひて九二つ
たけむふ
ひて九二つ
花ゆあまとし志のふそ人の
おもうけ

ひらひきての後のかりそめまにそ
ひしそねとおのしさうつもま
はらしきの何ゆおもかし下句をそれ草志のかす一筆
二花くいう皆物語くく

高まし草おふ此出へとそうへるつめと
おし志のふかつのちもまのさん

ありはつるとせきら紹しうらみ
ぬれ袖のなかうしは床をさまよふや
むかしを思ふ涙もかりし悲しり
しし菊
新古今集のうたに

せきもる紹といふに結ふよのかなしきより
椛月して立出ける[illegible]
ひらきの句
すまし給ふゆきを見て月を
なりゆくも草の海にあはれしき
人とはうつくしき紹の

十と九分
秋しほり

猿の声のつゝむし秋ハ月まさ名所の川音ある也て
そむ衣にそゆゑちハむかしくて
月をそえつれきぬの音

秋まつハとしうこゑへしをばるハうらし

新やのまきれてんてまきおもひの
ふうりしきさとへしく七夕のよきれ

おえりつゝあし地ハ篠の世

陸放翁が詩の心をむくさんとのふ人あさくの国り
作りへく七妹んのちくかんさよしてきの西の新
よりわつれきの琴の音よかふとおふくかんとく
きへくもゆく世との通行して七年のうち
けおりしろさんやしあしきもゆくせしときまき

花すゝき七組とおもてくみと
りうし